

『平家物語』の高校古典教材としての可能性(上)

—— 古典と古典B

田中幹子
加藤兼司

はじめに

前稿¹で『平家物語』が中学の国語教育現場でどう扱われているかを教科書と指導書を取り上げ、考察した。各教科書それぞれの特徴はあったが、全体として深い読解を志向しているのがわかった。では、高校教材としての『平家物語』は何が求められているのか、教科書、指導書を使って考察していく。本稿も、前稿同様に、共同研究者である本学四年の加藤兼司君の報告書を軸に、考察し、私見をのべる形をとった。

一、高校教科書『平家物語』の扱い

高校国語教科書は、中学教科書と違い、出版社の数が多い。しかし、『平家物語』を教材にしているものは少なく、今回は、第一学習社で出版されている二学年教材『標準

*1 拙稿「『平家物語』の中学国語古典教材としての可能性」『比較文化論叢』23号・2009年6月
札幌大学文化学部

古典』の「忠度の都落ち」の教科書と指導書を対象とする。(以下、加藤君による執筆)
「忠度の都落ち」の大意は次のとおりである。

薩摩守忠度は、平家一門の都落ちの途次、主従わずか七騎で京へ引き返し、和歌の師匠であった五条三位藤原俊成卿の邸を訪れ、日頃詠んでいた和歌一巻を託し、勅撰集撰進の際には、その中から、一首なりとも入集させてほしいと願いを述べる。俊成は感動のうちにそれを受け取り、疎略に扱わない旨を答える。忠度は高らかに詩を吟じつつ、心おきなく西国へ向かっていった。

その後、戦いが終わって『千載和歌集』撰進の際、俊成は忠度の一首を「よみ人知らず」として入集させたのであった、勅勤の身とはいえ、このような扱いは悲しく残念なことだ。

この章段をどのように指導することが求められているのか。指導書の「教材のねらい」には次のようにある。

①和漢混雑文の、韻律を踏んだ流麗な文章を味読し、内容を理解させるとともに、朗読による文学作品の享受、鑑賞を心がける。

②『平家物語』特有の語彙、語法、修辞などに注意し、適切な解釈、口語訳ができるようになる。

③冒頭の「祇園精舎」が示す、諸行無常・盛者必衰の哀感を具体的に表出するといふ『平家物語』全体に対する視点を持ちながら、登場する武人をはじめとする人々の生き方、考え方を、それぞれの人物像の分析を通じて考察させる。

④本教材は『平家物語』の後半の、平家の敗退・滅亡の場面を取り扱っている。そ

それぞれの場面の位置づけを考慮に入れつつ、内容・構成を理解し、主題把握に至るようにする。次の教材『義経記』につながる、歴史的・文学的に広がりのある視野をもたせたい。

⑤軍記物語の生まれた時代背景について理解し、『平家物語』に登場する武人達の行為や言葉を通じて、現代に生きる我々の生き方、あり方について考察する。

③から、登場人物の境遇や人物像を「祇園精舎」に表れたテーマの「無常観」に結び付けようとしていることがわかる。また④では、『平家物語』を貴族の時代から武士の時代へ移行するという、歴史的に大きな変革期であることを意識させ、内容読解に重点を置いていることがわかる。さらに、⑤から、遙か昔に死んでいった武人達の行為や言葉が、現代に生きる我々にとって、どんな意味を持つのかを考察するとしている。これは、『平家物語』をはるか遠い昔話としてではなく、生徒が共感し、自身の人生に向き合う作品として理解することが求められている。

次に、指導書の指導事例から教育現場で求められていることを考察していく。

『標準古典 指導と研究』（P170～172）の学習指導事例で『平家物語』は五時間配当で設定されている。

第二時間の展開で注目すべきは、「忠度と俊成の置かれている立場・心情を推測し、理解する。」「忠度の発言に表れている和歌への思いと決意、俊成の応答の言葉からうかがわれる思いやりを考え、まとめる。」である。その指導上の留意点では、「忠度と俊成の関係、忠度の置かれている状況や立場、俊成の心境などについて考えるよう示唆を与

える。「」当時の歌人たちの勅撰和歌集に対する思いなどについて示唆を与えつつ、考えさせる。」と書かれている。

第二時限のポイントは、忠度が最高の地位から一変、落人となってしまった立場や心情を考える点にある。ここは、忠度が落人の立場に追いやられ、しかも俊成の部下たちが「落人帰り来たれり」と騒ぐ中、俊成が忠度を邸へ入れる場面である。ここでは、まず、落人を邸へ入れることがどれだけ破格なことか、また俊成の立場を危うくするかを理解させる。その事を踏まえ、俊成と忠度の信頼しあった師弟関係を実感させる。さらに、当時の人にとって『勅撰集和歌集』がいかに特別なものであるかについて理解させたい。『勅撰和歌集』に採られることが歌人にとって一生の誇りなのである。

第三時限の展開での注目点は、「「前途ほど遠し」の漢詩及び「さざなみや」の歌を解釈し、鑑賞する。和歌の修辞について学習する。」「忠度の人間像について話し合う。」である。この指導上の留意点では、「漢詩のよみかえ、和歌の修辞などについて示唆を与えて、鑑賞させる。」「問答、口答による発表、メモ程度の感想文、問題提起による討論など、種々の方法によって忠度の人間像を浮き彫りにしてみる。」と書かれている。

第三時限では、忠度の人間像を考えることがポイントである。深く邸を後にする忠度を、俊成が惜しみながら見送っていると、遠くから忠度の声で漢詩の一句が聞こえる。指導事例では、馬にまたがり、去っていく忠度が高らかに口ずさんだ「前途ほど遠し、思ひを雁山の夕べの雲に馳す」の意味を解釈し、鑑賞するとある。この漢詩は、『和漢朗詠集』の一句である。忠度は、この漢詩と気持ちが重なり思わず口ずさんだ。意味は、

「旅の目的は遙かに遠い。あの雁山にかかる雲に思いを馳せながら前に進む。」である。³忠度はこの先に死が待っていないながらも、潔く運命を受け入れ自ら奮いたたせるように、前向きな漢詩を口ずさむ。そして「巻九 忠度の最期」では、片腕を切られながらも、奮戦し、武士として壮烈な死を遂げる。その忠度の首には一首の和歌がくくり付けられていた。忠度は、まさに文武両道なのである。このことを踏まえて忠度の人間像を理解させることが目的である。

俊成に託した和歌「ささなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな」⁴も解釈し、鑑賞するとある。ここでは、特に『千載和歌集』に忠度の歌を載せた俊成の思いを理解させた上で、伝えていきたい。意味は、「古き都、志賀の都は荒れ果てたのに、昔のままに美しく咲いている長良山の山桜よ。」である。俊成が撰集する際、忠度の言葉や態度が色あせることなく思い出された。それはまさにこの和歌が、古都の山桜と同じであると俊成は思ったのではないか。和歌が残ることによって、忠度は滅びようとも、人の心の中に、永久に生き続けるのである。その上で平家の人であるが故に、「詠み人しらず」にしなければならぬことに気づかせ、そこから歴史の厳しさを実感させる。

第五時限のまとめで注目するのは、『平家物語』全体を貫く思想について考える。点である。この留意点は、「冒頭の「祇園精舎」に立ち戻り、「忠度の都落ち」「能登殿の最期」に表れた無常の実相に気づかせる。」である。

第五時限のまとめは、冒頭の「祇園精舎」に立ち戻るとある。立ち戻るとは、「祇園精舎」の精神と「忠度の都落ち」とを結び付けることである。「祇園精舎」では、「無常

* 3 菅野禮行校注『和漢朗詠集』(小学館、新古典文学全集 1999年10月)の訳による。

* 4 『千載和歌集』(巻第一・春歌上・66「故郷花といへる心をよみ侍りける」)

* 5 片野達郎・松野陽一校注『千載和歌集』(岩波書店、新日本古典文学大系 1993年4月)

観」を「盛者必衰」「猛き人もつひには滅びぬ」と表現している。「無常観」とは、この世のものは全て、変化・流転することである。「栄華を誇ったものも必ず衰退する」「勢いがある者も滅びる」「生まれては、いずれは滅びる」、ゆえに人生ははかないという考え方である。しかし、生徒に伝えるべきなのは、「はかなさ」だけではない。

忠度の行為は、俗世に返り咲こうという考えではない。ただ自分の生きた証を残したかったのである。時代を懸命に生きた人は、滅びようとも、その思いを知った人の心の中に、生き続けるのである。いつまでも美しい忠度の姿は、『平家物語』の中で生き続けている。『平家物語』全体に貫かれた「無常観」を理解し、考えさせることが重要である。以上、高校教材における『平家物語』も深い内容読解が求められていることがわかる。

二、現行学習指導要領と新学習指導要領の古典指導の変化

高等学校の学習指導要領（以下『学習指導要領』）から古典教材の指導について、『現行高等学校校指導要領』（平成十一年告示）と『新学習指導要領』（平成二十一年告示）を比較し、考察する。科目の「古典」をみると、現行の「古典」「古典講読」が「古典A」「古典B」に改訂されている。「古典A」は二単位、「古典B」は四単位となっており、「古典A」は「古典講読」、「古典B」は「古典」に対応しているのがわかる。今回は、「古典」と「古典B」を比較していく。

古典B	古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる。	教科名	目標
<p>(1) 次の事項について指導する。</p> <p>ア 古典に用いられている語句や意味、用法及び文の構成を理解すること。</p> <p>イ 古典を読んで、内容や構成や展開に即して的確にとらえること。</p> <p>ウ 古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。</p> <p>エ 古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、物の価値について考察すること。</p> <p>オ 古典を読んで、我が国の文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深めること。</p>	内容	古典	<p>古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる。</p>
<p>(1) 古文及び漢文の両方を取り上げるものとし、一方に偏らないようにする。</p> <p>(2) 古典を読み深めるため、音読、朗読、暗唱などを取り入れるようにする。</p> <p>(3) 古語文法の指導は読むことの学習に即して行い、必要に応じてある程度まとまった学習もできるようにする。</p> <p>(4) 教材については、次の事項に留意するものとする。</p> <p>ア 教材は、言語文化の変遷について理解を深める学習に資するよう、文種や形態、長短や難易などに配慮して適当な部分を取り上げること。</p>	内容の取扱い	<p>(1) 古典及び漢文の両方を取り上げるものとし、一方に偏らないようにする。</p> <p>(2) 話すこと・聞くこと及び書くことの言語活動を効果的に取り入れるようにする。</p> <p>(3) 文語文法の指導は読むことの指導に即して行い、必要に応じてある程度まとまった学習もできるようにする。</p> <p>(4) 指導に当たっては、例えば次のような言語活動を通して行うようにする。</p> <p>ア 古文や漢文の調子などを味わいながら、音読、朗読、暗唱をすること。</p> <p>イ 国語の変遷などについて関心を深めるため、辞書などを用い</p>	71 『平家物語』の高校古典教材としての可能性(上)

イ

教材には、日本漢文を含めること。また、必要に応じて近代以降の文語文、古典についての評論文などを用いることができること。

内容の
取扱い

ウ て古典の言葉と現代の言葉とを比較対照すること。古典に表れた思想や感情の特徴、表現上の特色などについて話し合うこと。

エ 古典を読んで関心をもったことなどについて調べ、文章にまとめるとめる。

(5)

教材については、次の事項に留意するものとする。

ア 教材は、様々な文章や作品、文種や形態について、親しみやすく基本的なものを選べるだけ精選し、長短や難易を考慮して適当な部分を取り上げること。また上記(4)に掲げる言語活動が十分行われるよう教材を選定すること。

イ

教材は、次のような観点に配慮して取り上げること。

(イ) 古典を進んで学習する意欲や態度を養うのに役立つこと。
(ア) 人間、社会、自然などに対する様々な時代の人々のものの見方、感じ方、考え方について理解を深めたりするのに役立つこと。

(ウ) 様々な時代の人々の生き方について考えたり、我が国の伝統について理解を深めたりするのに役立つこと。

(ニ) 古典に読むのに必要な知識を身につけるのに役立つこと。
(イ) 言語感覚を豊かにするのに役立つこと。

(ウ) 中国など外国の文化との関係について理解を深めるのに役立つこと。

ウ 教材には、日本漢文も含めるようにすること。また、必要に応じて近代以降の文語文や漢詩文などを用いることができること。

エ 教材については、表記を工夫し、注釈、傍注、解説などを適切に用い、特に漢文については訓点を付け、時には書き下ろし文を用いるなど理解しやすいようにすること。

目標を比較する。

古典 「古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる」

古典 B 「古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる」

古典では「古典に親しむ」となっていると、古典 B では「古典についての理解や関心を深めること」となっており、より深く作品を理解させることに重要を置いていることがわかる。

内容を比較して、以下の三点に注目した。

一 古典 「古文や漢文に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解すること。」

古典 B 「古典に用いられている語句や意味、用法及び文の構成を理解すること。」
古典では「古文や漢文」としているのに対し、古典 B では「古典」とまとめている。
日本の古典は、漢文の影響を受け発展してきた。古文と漢文を別のものとせず、歴史的背景を踏まえた上での深い理解を求めているのがわかる。

二 古典 「古典を読んで、日本文化の特質や日本文化と中国文化の関係について考える」

古典 B 「古典を読んで、我が国の文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深める」

古典が「日本文化」としている点を、古典Bでは「我が国の文化」としている。これは、日本文化を自国の文化と強調していることを示す。ここで注目するのは、「古典A」「古典講読」とともに「中国文化との関係について」ふれている点である。日本の文化は、古くから中国の文化の影響を大きく受け、中国は切っても切れない関係にある。ここには、日中両文化を理解しなければ、我が国の伝統と文化の継承はありえないという認識があるのだ。

三 古典 「文章や作品に表れた人間、社会、自然などに対する思想や感情を読み取り、

ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。」

古典B 「古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。」

古典で「文章や作品に表れた」「読み取り」に対して、古典Bでは「古典を読んで」「的確にとらえ」と表現に差がある。ここから古典Bでは、生徒にしっかりと内容を理解させること、作品の深い読解を求めていることがわかる。

以上の比較によって、「古典B」では、深い内容読解を求めていることがわかった。さらに、「我が国」の表現や「日中関係」についての記述から、教科全体のテーマである「伝統と文化」に関しての指導が求められているのがわかった。

新学習指導要領は、作品自体の「深い読解」と「伝統と文化の継承」が求められ、ますます教師の教材の理解力と伝える力が必要だといえる。(以上、加藤兼司君執筆)

三、読解の設問における現行指導書の問題点

以上、新学習指導書がより深く内容を把握することを求めていることがわかった。現在は、まだ、新学習指導書が発行されていないので、現行学習指導書の設問と解答例を見ていきながら、より深い読解につながる設問、解答というのは、どのようなものが望ましいかを、いくつかの読解問題を中心に私見をのべたい。

問

『落ち人帰り来たれり。』とて、その内騒ぎ合へり。」とあるが、「騒ぎ合」った背景を考えてみよ。

答

平家一門は、木曾義仲の軍勢が都に入る勢いを示したため、一一八三年（寿永二）七月二十五日、ついに都落ちを決行したのである。その際、六波羅の邸をはじめ京の諸所に火を放ったので、京は相当の混乱状態に陥ったものと思われる。そのようなときに落ち武者忠度が引き返して来たのだから、門内の人々動揺は激しかっただろう。危険なことにかかわりたくない、できれば離れたいというのがそのときの門内の人々の気持ちではなかったか。そのような気持ち「騒ぎ合」うという状態に表れている。

〔標準古典 指導と探究〕P 一八五～P 一八八

都落ちしたはずの忠度が、都の俊成邸にいきなりあらわれた場面である。「背景を考

えてみよ」なので、都落ち、その際の混乱ぶりを説明しなければならぬ。その意味では、「平家一門は一略一、相当の混乱に陥った」という説明は、概ね首肯できる。

しかし、この章段を読解する上で必要な事は、京の人々が、どのような目で忠度を迎えたかということである。平家が都落ちする際、放った火は、一般庶民の家も焼いてしまった。彼らにとって平家は恐怖であり、憎しみの対象であった。『落ち人帰り来たれり。』とて、その内騒ぎ合へり。」と、恐怖で慄くのは、俊成の屋敷内の人々だけでなく、京の人々の一般的な心情であろう。「落ち人」という表現には、ついこの前まで権力者として崇めていた対象への、手の平を返したような残酷に見切る姿勢がよみとれる。人々の恐怖心とともに冷酷さを踏まえることで、対照的に師として迎え入れた俊成が、いかに暖かく人間性溢れるかとして描かれているかを理解できる。従って、内容読解のための設問としては、「なぜ「騒ぎ合」ったのですか」あるいは、「その内」の人々は、どのような気持ちだったのですか」がふさわしい。続いて、脚問。

問

「さること」は何をさすか。

答

忠度が都に引き返して俊成の邸を訪れた理由。

「何をさすか」という問いなのだから、「ををさす」という形で答えなければならぬ。ここは、「さること」とは副詞「を」(そのように)「ある事」なので、問に対する直接的な答えは、「忠度が都に引き返して俊成の邸を訪れることをさす。」である。しか

し、章段読解のためには、なぜ俊成が、「忠度が引き返ってきたのには、それ相当の理由があるのだろう」と述べたのかを考えさせることが必要である。それが、歌で結ばれた強い師弟愛を読解させることに導く。

問

「ことこの体、何となうあはれなり。」とあるが、なぜそのように見えたのか、その時の状況を説明せよ。

答

忠度は甲冑に身を固め、死を覚悟してこれから西へ落ちて行こうとしている。このようなときにも和歌に執着を燃やして引き返してきた忠度のけなげな気持ちと、それを知っていて、しっかりと受け止める俊成の痛切な気持ち、その両者の対面が全体として感慨深く、「あはれ」と感じられたのである。

「なぜそう見えたのか」という問いに対し、解答例は、「忠度は甲冑に身を固め、死を覚悟して」いる時も「和歌に執着」して引き返した「けなげな気持ち」と、それを「受け止める俊成の痛切な気持ち」、その「両者の対面が全体として」「あはれ」と感じられた」となっている。しかしこれは、「あはれ」な場面と見た第三者的解釈である。「あはれ」なのは、忠度である。俊成の目を通して語り手が忠度の様子を「何となうあはれなり」と評しているのである。なぜ、忠度の様子が、しみじみと感慨深いものだったのか、それを考えさせるのが読解であろう。その答えは「死を覚悟した上で俊成に歌を託そうとした悲痛な状態だったから」というものであり、これは、この章全体を理解

しなければ答えられない問である。

次に文法的な問題。

問

次の「候ふ」の活用形を答えよ。

「年ごろ申し承つてのち、おろかならぬ御ことに思い参らせ候へども、この二、三年は、京都の騒ぎ、国の乱れ、しかしながら当家の身の上のことに候ふ間、疎略を存せずといへども、常に参り寄ることも候はず。君すでに都を出でさせ給ひぬ。一門の運命はや尽き候ひぬ。撰集のあるべきよし承り候ひしかば、生涯の面目に、一首なりとも御恩をかうぶらうど存じて候ひしに、やがて世の乱れ出で来て、その沙汰なく候条、ただ一身の嘆きと存ずる候ふ。」

答

①已然形②連体形③未然形④連用形⑤連用形⑥連用形⑦連体形⑧終止形

ここでは、まず「候ふ」についての最小限の語史を教えなければならない。平安期には出てこず、鎌倉・室町に現れた男性使用の丁寧語であり、『軍記文学』特有の語句であることを指摘し、この語句に注目させた上で、活用形を考えさせるべきである。

そして、「ども」は、漢文訓読調につく接続助詞であり（和文は「ど」）、それに接続する活用形は、已然形であり、逆説確定条件になることを教え、読解させることが肝要である。

「候ひぬ」の場合、まず「ぬ」が連用形に接続する完了助動詞であることを確認する。次に意思的・人為的動作の完了の「つ」ではなく、無意識的・自然的動作の完了の「ぬ」を使っている意味を教え、「はや尽きぬ」と平家滅亡を運命としてどうと受け入れる潔さを読解すべきであろう。つまり、読解のための文法解説であるべきなのである。

問

「さりぬべきもの」は何をさすか。

答

勅撰集に入れるのにふさわしい歌。

「さりぬべき」は慣用句で「適当である」「相応しい」の意だが、まず原義として「さ」ありで「そうある」、「ぬ」「べし」で「〜にちがいない」の意であることを解説する。それを踏まえ、勅撰集に対する忠度の崇高な思いが、「相応しい歌」という表現になっていることを説明すべきである。

問

「遠き御守りでこそ候はんずれ。」の傍線部を文法的に説明せよ。

答

「こそ」は強意の係助詞。「候は」丁寧の補助動詞「候ふ」の未然形。「んずれ」は、「んず」の已然形で、「こそ」の結び。「んず（むず）」は推量の助動詞で、意味は「ん

(む)「を強めたものである。

勅撰集入集の願いが叶うなら、どれほどありがたいかという忠度の切迫した思いが、係り結びや「むず」の強調表現となっているのである。落人となった今となっては、感謝を返す術がないからこそ「遠き御守り」という言葉になっているのだ。追いつめられた忠度の厳しい状況であることを理解させるのが望ましい。

問

「さざなみや」の歌に用いられている修辞を指摘せよ。

答

枕詞と掛け詞。

・枕詞……「さざなみや」が「志賀」に掛かる枕詞。

・掛け詞……「ながら」が「昔ながら」と「長良山」の掛け詞。

「さざなみ」は、上代では、「ささなみ」と清音であり、「ささ」が「細い」「小さい」意の接頭語で「小さい波」という意で琵琶湖周辺の呼称だった。それが、「さざなみ」となり湖周辺の地域、大津・志賀・比良山・長良山の枕詞になった。「ながら」の掛け詞は、昔ながらの意と長良山の意を掛けているが、ここには長良山が昔と変わらない意を込めている。

そして、生徒には、ぜひこの歌意を理解し、俊成の思いを読解してもらいたい。

荒れた旧都に、それでも美しく咲く山桜の姿は、最後に、俊成に歌を託し、潔く別れ

を告げた忠度の姿である。平家滅亡から五年たっても、名を載せられないという勅勘の厳しさであり、勅撰集の重みであることを解説するべきであろう。

以上、このように設問を通して、要所、要所の解説を加え、読解した上で、章全体を振り返る。

四、総括の設問について

問

忠度の発言からうかがわれる決意と願望を整理してみよう。

これに対する解答として、以下のとおり、本文の忠度の言葉の中から、忠度の決意と願望が表れている箇所を抜粋指摘し、解説をしている。

答

君すでに都を出でさせ給ひぬ。一門の運命はや尽き候ひぬ。―平家一門の滅亡を予期して死を覚悟している忠度。

撰集のあるべきよし承り候ひしかば、生涯の面目に、一首なりとも御恩をこうぶらうど存じて候ひしに、……ただ一身の嘆きと存ずる候ふ。……さりぬべきもの候はば、一首なりとも御恩をかうぶって、草の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御守りでこそ候はんずれ。―勅撰集入集にかけた忠度の執念

ここには、忠度の死を覚悟している様子と、その死以上に芸道（歌道）にかけて執念のほどがうかがわれる。

傍線部分には、忠度の勅撰集入集への強い願望がうかがわれる。波線部分には、自分の「死」を前提として、そうであるがゆえに、いっそう燃え上がる勅撰集入集への強い願望が表わされている。それは、今まで生きてきたときに燃やした歌道への執念そのものの反映でもある。

さらに、俊成が快く引き受けた言葉を聞いたあとの忠度の心境は、今までの執念を一挙に晴らしたすがすがしいものであった。

「今は西海に沈まば沈め、山野にかばねをさらさばさらせ。浮世に思い置くこと候はず。さらばいとま申して。」とて、馬にうち乗り甲の緒締め、西をさいてぞ歩ませ給ふ。……忠度の声とおぼしくて、「前途ほど遠し、思ひを雁山の夕べの雲に馳す。」と、高らかに口ずさみ給へば、……

傍線部分には、歌道にかけてきた忠度のすさまじい執念がうかがわれる。しかし、このように歌道にうちこんでいても、武士としての立場と職責を決して忘れず従容として死に向かっていく忠度の決意と覚悟のほどが波線部分にうかがわれる。さらに、点線部分には、別れてゆく俊成への惜別の情をさらりと表現し、全体として文武両道にすぐれた忠度の面目を生き生きと描写してするのである。

以上の解説は、概ね首肯できる。特に俊成に歌集を渡し、意を伝えた後は、一転して、執着心が無くなり、己の運命を受け入れる潔さが表現されているという指摘は、忠度が

文武両道の人物であることを表している。さらに（指導上の留意点）として、忠度の行動の機敏さを指摘することが、優秀な武士として側面を表していることを指摘している。忠度への理解としては、十分な内容といえる。

続いての設問。

問

忠度に対する俊成の思いやりはどのように表現されているか、整理してみよう。

この問いに対する解答は以下のとおりである。

答

俊成は、落ち人が来たと言って騒ぎ合っている邸内の人々を前にして、「その人ならば苦しからまじ。入れ申せ。」と言って忠度を門内に入れた。こゝは、和歌の弟子忠度の人柄への信頼と深い理解が示されている。さらに歌の巻き物を受け取ってから「かかると忘れ形見を給はり置き候ひぬるうへは、ゆめゆめ疎略を存ずまじう候ふ。御疑ひあるべからず。さてもただ今の御渡りこそ、情けもすぐれて深う、あはれもことに思ひ知られて、感涙おさへがたう候へ。」と言って、忠度の来訪を俊成自らも深く感動したことを忠度に伝えている。これは、死を覚悟して西海へ向かおうとしている忠度に対しての最高の思いやりといえる。そして最後に詩を吟じつつ西に向かつて馬を進めて行く忠度の姿を見送って、「いとど名残惜しうおぼえて、涙をおさえてぞ入り給ふ」という描写にうかがえるように、忠度に対して、愛惜の念尽きがない様子が描かれている。先にも

ふれたように、当時、平家一門は、都落ちなどで混乱を極め、人々は平家の人々を落ち人と言って恐怖の目で見ていたのである。このようなときに忠度との歌道のきずなをしっかりと守って、堂々と、かつ慈愛深く忠度の願いを受け入れた俊成は、懐の深い大人物として描かれている。

とする。さらに（指導上の留意点）で、覚一本の俊成像とは異なり、忠度の訪れをわななき出会ったとする延慶本を紹介している。

しかし、延慶本平家の特長も紹介せずに、いきなりこのように紹介するのは、平家諸本の問題を考察する上で学習者に先入観を与えるのではないだろうか。

何より、俊成の忠度への心情を理解するには、「さざなみや」歌を選んだ俊成の思いを読解しなければならぬはずである。そのための和歌の修辭の理解であるべきであろう。

最後の設問で、語りの物ゆえのイ音便・ウ音便の多用、漢語の影響を受け、促音便・撥音便が多くなっていることの指摘は、音読させながら、体験として理解させることができ、有益である。

五、望まれる指導書

以上、現行指導書の設問を取り上げ、読解の助けとなる解説指導について私見をのべてきた。総括してみると、現行指導書では、深い読解に結びつける文法や修辭の設問がないこと、また、読解問題も、設問に合致した解答例ではない点が気になった。

学指導要領が、知識によって、より深い読解を目指している以上、文法解説も読解につながる設問が必要であり、また解答も、拡散していくのではなく、設問の芯を捉え、印象が明確になるような解答が必要であろう。特に『平家物語』は、歴史事実との照らしあわせが必要で、客観的な事実と、文学との虚実皮膜を意識し、指導できる力量が必要である。その助けとなる指導書が望まれる。